1968

自治会学校

討議資料

由井・哲夫
小林・後藤
平賀・多
久保

5月20日〜21日　唐崎ハウス

[昨年度総括
今年度方針
各委員会総括と方針
5.24全学ストライキに向けて]

神学部自治会

六十八年度神学部自治会方針

Ⅰ序　激動する世界状況と迫来る反動の嵐の如き攻撃――これに神学は如何に対応できうるのか、或は対応できうる神学を如何なる目的意識性を以てその形成を志向するのか。この我々に与えられた急務の課題を昨年に於ては神学的実存として或はNonsteroの問題として共同体思考を媒介としつつ追求して来たのであった。しかしながら、その媒介たるべき共同体自体が幻想の産物以外の何ものでもなかった事を自己批判的に総括しておかねばならない。神学主体者の寄集まりとしての神学部共同体といった単純な発想は今日では全く意味を為さないのである。我々が一つの言葉を吐く時、その言葉の意味内容が厳しく徹底的に問われねばならない。神学主体者として今日の状況に存在せしめているものは一体何であるのか、そして、そういった神学主体者の寄集まりの共同体という場合、その共同体のいうならば団結の質の内容が明確に問われねばならない。今年は安保を二年後に控えた極めて重要な年である事は疑う余地のない事である。我々の前には重大な任務が山積みされている。その内で最も重大且つ緊急の課題がこの共同体の団結の質の内容を問うていく事ではないだろうか。そしてこれは組織体制の確立という方針のもとになされる必要がある。

Ⅱ組織体制の確立我々は共同体の質の問題を個々人のバラバラの探求だけでなくして(もちろんそれは必要であるが)それを持寄って一つの方向性を志向しつつ追求していくといった作業で追求して行かねばならない。①それを具体的に研究会という形で提起しよう。名称は神学研究会とし自治会活動の主要な一環として機能させる必要がある。ここで為すべき事は神学的実存の内容を再度組直す事である。具体的活動内容に関してはは研究会実行委員会である編集委員会が②ら述べてもらう。②我々は研究会と同時に、現行の礼拝至上主義に転落した月曜集会を我々のものとして行こう。それは月曜集会に学問的内容を全面的に盛込んでいく事であり、我々の日常的学問研究の発表の場としていく必要がある。これも具体的には月曜集会委員会の方から提起してもらう。

③③我々神学部自治会にとって夏期活動は重要な意味を持っている。昨年から既に目的意識的に夏期伝道を夏期活動として他方面の活動を織込んでいたのであるが、今年からは明確に名称を夏期活動委員会とする事により教会のみへという限られた奉仕活動という方だけでなく、例えば八月の反戦広島集会参加等、広範囲の活動を公然と自治会の夏期活動として織込んでいかねばならない。

Ⅲ　我々自治会内部の組織体制の確立と同時に現在のインセミ自体を変革し組織化していかねばならない。それは七〇年を一つのメルクマールとした組織化であり、来年、東京神大での大会には、安保反対の決議を勝取るといった目的意識性にのっとって、今年は各神学部・神学校をオルグしていく必要がある。具体的にはインセミ委員会より詳しい提起があるので、省略する。

Ⅳ政治方針　これに関しては五・二四全学ストに関する資料の中に含まれているので、ここでは省略する。

同志社大学神学部68年度自治会委員長　由井哲夫

六七年度夏期伝委員会総括

夏期伝委員長　小林俊彦

一、六七年度の夏期活動のテーマは、"教会のわざとは何か"であった。夏期伝委員会がこのテーマを決定した行きさつは、一つには従来、教会のわざというものが既成の教会の諸々の宣教、奉仕活動に限定されて考えられて来たことに対する問題意識と、もう一方においては先輩たちを通して受けつがれて来た"教会論"の問題を真剣に取上げねばならぬという要請であった。現在、世界状勢の流動化と並行して、教会はいわゆる価値観が分解し、多様化してきている。そうした時代、状況の中で、教会は可能な限り伝統的儀式と組織、制度、そしてドグマに固執しているとすれば、そういう教会は現代人に対しては何ら語りかける言葉を語らねばならないであろう。我々は普遍的な言葉を語らねばならない。

そこに我々が従来、"夏期活動"として語られて来たものを"夏期伝道"として捉えなおした理由はあるのである。教会のわざを既成教会の枠において捉える人間の営みの深みにおいて普遍的世界における方向性がここに設定されたのである。

これは、夏期伝委員会の意図にもかかわらず、結果的には既成教会の中に派遣された部分は、自己の主体性を埋没せしめて来たという事があった。こんこ、"夏期活動"という枠の中において、単に既成教会への派遣のみならず、広島における"まいまいトット"水禁大会、山谷における奉仕活動、又、残ってアルバイトをした部分をも包含して、それぞれの場において、"教会のわざとは何か"というテーマを貫徹して行くことを目指した。そのことによって、既成教会における活動に参加した部分よりも寧ろ、教会外における活動に参加した部分の方が貴重な問題意識が得られたということが指摘される。今後、こうした問題意識を発展せしめる方向性において、"夏期伝委員会"として、ひいては"夏期活動委員会"の内実を持った組織として、既成教会に対する強烈な批判的部分として成長させたいと考える。

二、六七年度夏期伝委員会は教会論の問題を中心として、一貫して問題意識を持ち続けて来た。昨秋以来の政治斗争、即ち一〇・八羽田斗争に神学的実存として、又、その問題意識を持ちつつ積極的に参加し、それ以降の斗争を経過する中で、今日に至るまで一貫して問題を追求して来た。

ミニ現在、我々神学する者を含めて、政治に関心なき合うこと、全ての人間が人間であることが出来ない状況、あなたの為に、あなたの前に、神学。

そして、教会は人間の前で我々は人間であることを拒否し、神学を捨てる。

教会に固執することを拒否する者は、神学を拒否しようとはしない。

立たされて、少くとも同志社の神学生はこの問題を拒否しようとはしないであろう。我々は

いし、又、安易に答えようとは思われない。その答は我々自身の実践的行動とそれを支える神学の構築によってのみ可能となるであろう。

三、報告書に関して未だ提出されていないという状況があるが、それは決定的に原稿が集まらなかったということに最大の原因があるが、原稿を寄せられた方に対しては深くおわびしたい。なお、受取った部分に関して責任を以って次期夏期活動委員会に引きついで頂く予定である。

四、我々は夏期活動に際して、鳥取教会永田善治牧師を招聘して、学生二人を含めて、ネル、ディスカッション、ディスカッションを行い、後期の第一回の月例集会において、報告を受けた。この二回の集会において、既成教会に対する問がある程度、神学生一般の中におろされたと考える。そして、その問が、イン、セミを経過して今日までもたらされ、現時点に至って、我々の意図した内容が一定に意識化され始めて来たと考えられる。今後、こうした方向性をより強く、より新しい教会論の形成を願うものである。

月旺集会委員会68年度方針

今、世界は岐路に立たされている。我々はまさにこの時代(とき)を選択の決断を迫られている。今も、厂史は我々にその全生命をかけて向うている。「まだなのか。」と。この問は絶える事なく、厂史の中に生きた全ての人々に向続けられて来た。そして今や我々に向われているのだ！「まだなのか」と。

世界は激しく流動している。迫来る厂史の問に我々は応え得るのだろうか。我々はキリスト教徒である、我々は神学生である。という意識は一体何であるのか。或は、神を信仰しているとか。神、教会、信仰という語が、我々には余り強すぎる故に一しかもそれらは単なる幻想でしかない！、確かに我々の決断を鈍らしている？と言えないだろうか。

我々はキリスト教徒である、我々は神学生である、という意識は或る意味に於て、阿片ではないだろうか。

我々は、一切の事物をキリスト教的に、という前提の下に考え、語り、行なっているであろう。が、そこに最早、事実を事実として洞察する力が失われているのではないだろうか。我々のいわゆる教会は社会を知らない。社会から遊離している。教会は自らの社会を形成して来た。社会に奉仕するという事とは裏腹に。時おり「紀元節」「靖国神社」という事になると、恐らく、その利害関係に於てのみ「反対！」と叫ぶのである。教会は厂史を、その連続性を知らない。教会は懐古主義にあけくれている。礼拝式に於る一時的陶酔は阿片的役割を為し、我々の意識を殺害し、我々の一切を奪ってしまうだろう。これが神の業だとしたら極めてその犯罪性は残虐である。しかも、我々が我々の生を生きるのか、それとも他人の生に強いられるのかという状況の下では。

我々はかかる教会に片棒をかつぐ為に神学部にいるのであろうか。

かかる状況(一面的ではあるが)の中で、神学部教授会は自治会は月旺集会なる時を持っている。しかしながら現在まで一貫して教授会当番制の礼拝式でしかなかった。そこに於て語られることは、正しく教会的内容であり、総合大学の神学部として語られるべき問題は一切語られなかった。今年度より、月旺集会を集会たらしめるべく、学生の手導権掌握の下に押進めて行きたい。

具体的には、学生側より主体的、積極的な発題を求め、単なる形式のみの月旺礼拝とする事は拒絶したい。総ゆる分野から外来講師を招き、自主講座的内容を強化し、且つ我々の発題のみなず、研究発表の場、時として、月旺集会があ

る事を認識して行きたいと考える。

我々は70年安保を控え、帝国主義諸国が崩壊しつつある中で、あの米帝国主義の通称和平会談が行われているのを知っている。それ故未だ北爆は続行されており、フランス＝パリでは、学生・労働者の大ストが起っている。ドイツにおても、イタリーに於ても……そして日本にに於ても、反戦手争が反帝、反政府手争に転換し、着々と進行されている反動侵略者の狂暴的な政治内容を、決して我々は彼岸の火事にしたてることはできない。世界は岐路に立たされている！我々が決断しなければならない時、過去の月旺集会を続行する事は犯罪に等しいであろう。

更に、週報は、壮図寮印刷局が担うことにし、費用を残し、それで、村関紙を発行する事にしたい。

文責　月旺集会委員長　平賀久蕃

新企画委員会報告　'68年度

昨年度自治会活動のテーマとしてかかげた「神学的実存」に於ていかなる点が問題・課題として浮び上がって来たのか。

昨年度特に後期に於て学園内外で問われた政治・経済問題に、積極的参加をなして来た、またなそうとして来た我々に最終的決断を迫り、問わしめたものとは決して現在の既成教会を保護し温存させてゆこうとする内容をもった神学などではなかった。またそのような内容における「神学的実存」と云うものでもあり得なかった。まさに我々をして問わしめたものとは常に我々を歴史の中に於て客体化しようとする現在の状況にどう我々自身が対決してゆくのか、と云う問を鋭く突きつけてくる〝もの〟ではなかったのだろうか。「神学的実存」のもつ意味内容を、今後そのような〝もの〟として考えてゆきたい。そしてまた歴史にくい込み得るエネルギーをもったものとして真に主体的に我々自身の内に形成してゆかねばならない。

そのような作業を行うことこそ、同志社神学〝であるかも知れないし、同志社神学を形成してゆくための重要な布石であるかも知れない。

昨年関学との交歓会を開くことが出来得なかった。この件に関しては徹底して反省しています。そこで問題としてとり上げたい事は、関学に於て神学部学生会はあるが、自治体として活動できない状態であることです。この交歓会がまさに自治体と自治体とのものであると意味づけて来たことを十分に生かすためにも、有名無実でしかない学生会を自治活動のやり得るものへと向かわしめることが、イ、セミ委の総括・方針にもある如く重要になって来るし、徹底した討論を巻き起こし有意義な交歓会を保証すること であろうと考えています。その他、他の委員会との関連に於て今年度の自治会活動を円滑かつ有意義ならしめるよう活動してゆこうと考えています。

インセミ総括と方針

インセミ委員長　小田至臣

一、総括

神々の没落の時代、あらゆる権威とあらゆる価値観が崩壊する時代、それがぼくたちの住んでいる時代である。教会に神が住んでいるという神話は民主々義の神話と共に、ぼくたちの心の墓場に葬り去られたばかりである。ぼくたちはたった今から何もない所から歩み始めなければならない。

去る五月三日、インタセミナリカンファレンスが、我が同志社大学において持たれた。"現代の救いとは何か"という テーマの下に、ぼくたちは新しい教会論を模索した。ぼくたちの言葉はたどたどしかったけれども、現代の動揺と分解の時期をいっぱい生き抜こうとするぼくたちの姿勢は、そこに集った全国の神学生諸君の胸に鋭く通ったはずである。この大会においてぼくたちの意志をある程度まで貫徹し得たのは、六七年度インセミ委員諸兄の涙ぐましい努力の結果にほかならず、この点に関して、異論をはさむ者は一人もいないであろう。しかしながら、今回のインセミは又、ぼくたちに重い課題を残したと言うことも記憶されねばならない。

(一)

インセミカンファレンスという動きが第一の問題である。従来、インセミ・カンファレンス＝国内神学校連絡協議会はそれの本来的に持っているところのお祭り的ムードが一定に問題視され、カンファレンスがフェスティヴァルか、という点において、論議が重ねられて来た。しかしながら、今回の大会において、同志社が提出した問いはカンファレンスかムーヴメントかというものであった。それは七〇年を目前に控え、その年をぼくたちの生き方が裁かれるべきカイロスとして受けとめようとするぼくたちの志向性と焦燥が必然的に産み出した問題であったと言えるだろう。世界の情勢がめまぐるしく変り、変動して行く時代にあっては、時向性を無視したお祭り騒ぎや話し合いなどというものは、もはや何の意味をも持ち得なくなっている。今、もし何らかの意味を持ち得るものがあるとすれば、それは過渡的な情況との息づまるような緊張の中で、血のように吐かれた言葉だけである。もはや、インセミがカンファレンスとしては意味を持ち得なくなっているという判断に立って、ぼくたちはインセミの延命の道をムーヴメントという方向性に求めた。しかしながら、前インセミ委員会の努力にも拘らず、各神学校の個別事情（自治会が未組織、教理的な問題等々）によってこの方向性はインセミ常任委員会においては確認されず、今後の課題として残された。

(二)

宣言（案）の問題

我が同志社神学部自治会常任委員会は今回のインセミ大会において、靖国神社、紀元節および七〇年安保に向けて、国家に対するぼくたちの激しい怒りの意志表示として、宣言（案）を採択させようと、試みた。しかしながら、前インセミ委員会はインセミ大会に結集した神学生の事情から判断して分裂を避けるため、それを見送り各校に持ち帰り検討するということで収約した。来年は東京神学大学においてインセミ大会が持たれる。それに向ってぼくたちは今から全力をあげて、オルグ活動を開始しなければならない。

二、方針

ぼくたちの生き方が承認されるのか、それとも厳しく裁かれるのか。七〇年という年は、ぼくたちの生を問題とする怪物として、ぼくたちの眼前にすぐ目の前に、無気味に横たわっている。ぼくたちの学びと行動と、そして殊にも信仰がこの闘いを回避してはありえないという状況に直面している。そして、そこでぼくたちはおのおのの自らの課題の重さに身震えする。ぼくたちにはこの一大闘争を戦い抜く力量は一切ない。しかし、ぼくたちが人間であるために、この戦いを拒否することができない。そうしたジレンマと焦燥の中から次のように方針を提起したいと考える。

(一)

ぼくたちはインセミから脱退しない。前インセミ委員会においては現状のままのインセミ＝カンファレンスであるならば殆どその存在理由がないということが総括された。そして、その唯一の延命の道はムーヴメント＝運動体の方向性を取るということであった。新インセミ委員会は主体的力量の及ぶかぎり、この方向性を押し進めたいと考える。そして、それを可能にするために、インセミ大会がどこで開かれるとしても同志社はそこにヘゲモニーを貫徹して行くことを確認したい。そのために、ぼくたちは加盟各校に対して常時、月曜集会通報、神自新聞と共に、オルグビラ等を送付する予定である。しかし、ぼくたちのそうした努力にも拘らず、きわめてナンセンスな局面が現れたとしても、今や最も先進的にインセミを向っている同志社はそれから脱退することは、最大限避けたいと考える。

(二)

全神学校に自治会を。

ぼくたちにとって自治会は自明の理である。しかしながら、同志社を除くほとんどの神学校においては、未だ自治会が存在しない。存在しても自治機能を果し得ていないというきわめて異常な状況がある。ぼくたちがもし、神学校の連帯、いわんや運動体としてのインセミのヴィジョンを考える時、各神学校に自治会を樹立することは不可欠の条件である。これに向けても、インセミ委員会は責任を持ってオルグビラの送付、ヌ、インセミ常任委員会を通して、働きかけたいと考える。

(三)

新しい教会論、同志社神学の確立を。

ぼくたちの政治的な意識と実践的行動は、いつもドグマチズムに陥る危険性をはらみながら、ラディカルに表現されて来た。しかしながら、ぼくたち意識と行動を支えて来たものは、一定に同志社ナショナリズムであって、同志社神学ではなかったということを反省しなければならない。それ故に、ぼくたちの多くの先輩にその例が見出される如く、同志社ナショナリズムの枠にいる間＝学生時代だけ、先進的に行動し、卒業と同時に体制そのものへと質的転換をとげるという魔術が多々演じられた。ぼくたちの心の中にはもはや既成の教会、既成のキリスト教はなくなってしまった。ぼくたちは空虚である。そしてこれを埋めるのは僅達自身である。今年十一月には西南学院においてインセミの神学セミナーが政教分離の問題をめぐって開かれる。ぼくたちはその時に果して、心の空虚さを抱きつつ開門トンネルをくぐるのか。それとも新しい神学を携えて行くのか。新しい教会論、同志社神学の形成を求めて、インセミ委員会は夏期活動委員会と共に教会論の探究を行なうことを決定した。その成果は、神自新聞、月曜集会等を通して神学生全員におろす予定である。

夏期活動委員会六八年度方針

昨年の夏期伝道委員会は、大きく二点にわたって総括している。即ち、従来の夏期伝道という名称のもっている限界、具体的には夏期休暇という比較的自由な時間を利用して、各但教会で奉仕活動を為している者のみが対象となり、広範に様々な分野で活動している部分、例えば、瓜谷での活動、まいずるグループでの活動、原水禁での活動をなしている部分は、何等夏期伝道の対象として考えることができなかった。この限界性を打ち破る必要から、夏期伝道を夏期活動という名称に変更し夏にあらゆる分野で活動している者を神学部自治会運動の一環として位置づけた。この総括の上に立って、基本的にそれを継承していく方針である。即ち、夏期活動をなす全ての神学部学生が、あらゆる分野で神学的問いを先ず持って提起し、夏期伝道となすべく、学生大会に先鋭化させるための問題提起を徹底させたい。昨年の段階においては、問題提起が出されたにもかかわらず、一般に充分な浸透が果されず、特に教会へ奉仕に散った部分は、旧態然とした心情的感想以上のものを得ることができず、従って、神学的問いは創造的に先鋭化されるに到らず、神学部共同思考の枠内に登場し得なかった。この点を考慮して、夏期活動に出発する以前に問題提起を徹底させ、各但がその活動の場所で目的意識と問いをつかみ把握し、追求し続けるように努める方向性を設定する。

二点目の総括として、昨年一年間、夏期伝道委員会が「教会論」を追求したことが挙げられる。即ち、流動する現代社会における教会がいかにあるか、またそれ故にいかにあるべきかという問いを一貫して追求したことである。この問いは、本年のインセミで継承されたものであるが、この課題を再び継承し、問い続けていく。具体的には、インセミ委員会と共に研究会を持ち、組織的且つ体系的な教会論を構築する。これは過去の同志社の先輩が常に鋭い問いを発し、現実の教会を批判していったにもかかわらず、現実の教会へ入っていった時、そこに吸収され、埋没していった部分が少なからずあったという事実の反省からも、教会論の追求が必要である。

以上、教会論を夏期活動委員会の中心点とし、その内容を具体的に問い得る最も有効な夏期休暇を視点として活動する方針であるが、問いを単に夏の期間だけで終らせるのではなく、一年間を通じて問い続けていく。そしてその問いを現実の教会に発するだけでなく、政治的・経済的・社会的諸問題と対時する中でも問うていきたい。特に、現在という状況は、緊迫の真只中にある。六〇年安保の延長上としての現在は、その条約の故にベトナム戦争という犯罪の中で、我々に尚その加担を強いてきている。そして、我々は既にその罪性の中に陥し込まれている。この犯罪的状況に切り込み、七〇年安保粉砕に向って、行動していく必要があるだろう。この状況との対決なしに、教会論形成に努力したとしても、それは、片輪足けた二輪車で突走ることと考えると同様、愚かな行為である。また、教会を向うこと自身、不可能である。

夏期活動委員長　樋口修一

せざるを得ない。日共、社会党の排外主義を粉砕し、日帝の70年安保に対決する斗いは、10/8ール/12ーエンプラ・成田ー王子の血の現地斗争を切り開いた新たな政治＝侵略外交と帝国主義軍隊形成粉砕の斗いである。4/28沖縄デーに於て4/26国際反戦ゼネストのエネルギーを政府中枢へたたきつけたのもここにあるこ、我々の政治の正しさもここにある。

社共、総評を一般的に対米自主性を基軸とし、沖縄核基地付返還ー自衛隊の核武装化を自主防衛として展開しようとしている佐藤政府に協力しているにしかすぎない。我々の斗いは米軍政打倒ー米軍事基地、B52撤去斗争を斗う沖縄人民と連帯する内宮、自衛隊の帝国主義軍隊化阻止＝防衛反対斗争であった。

今、我々は、70年安保斗争の原型を作るべき斗い、即ち政策阻止の現地斗争を日帝権力中枢部へ対決する中央現地斗争へ転化進展せしめなければならない段階を迎えている。

③現地斗争で切り開かれた日帝の70年安保へ至る統路線＝侵略外交と軍事力強化に対決する政治戦略で全学友と結合し、同志社から全国へ最も先駆的に70年安保粉砕の烽火をかかげよ！

佐藤政府のベトナム和平歓迎は、東南アジアねらう米帝後退を期待し、マレーシアねらう英軍後退とも相きって、日帝自らが東南アジア侵略へ進出する為に対米自主性を主張しつつ自衛隊の帝国主義軍隊化確立をめざしている。

東南アジア、太平洋地域圏清算幻想で沖一次沖二次東南アジア訪問を敢行し、山崎君殺害の裏で后進国軍事政権と手を結び、訪米以后、東南アジア太平洋共同防衛圏幻想で、自主防衛、国防論の下軍事力強化をはかっている。

即ち、5月13日から南ベトナムに開かれている日米安保協議会は(イ)ベトナム戦争后の東南アジア、(ロ)沖縄、(ハ)中共という日米西帝国主義の東南アジア支配の直接会談であるし、5月下旬には侵略の要、基地建設に向けて成田空港ボーリングを強行的に行なわれようとしている。それはむろん沖縄核付返還＝東南アジア侵略の前進基地化と固く結びつき進行している。

そして日帝＝佐藤政府は7月ASPAC(アジア太平洋閣僚会議)を開催し、タイ、韓国、フィリピン、オーストラリア、台湾、マレーシアの諸閣僚をもって強固な市場支配、勢力圏をつくろうとしている。その後、日米安済合同委員会をもち、来春、佐藤訪米へとピッチをはやめている。

70年安保は日米西帝国主義の侵略と抑圧、反革命の軍事同盟の更なる強化であり、その下での日帝の東南アジア侵略と国内労働者、人民、学生の抑圧である。同志社大学は全国のどの大学よりも早く先駆的にこの斗いの烽火をあげねばならず、我々神学部自治会は学部ストライキによりその先端を担あうではないか！現地斗争を全国各地へ波及させ、日帝の総路線に対決する学園陣地を打ち固めよう。

——2p——

安保粉砕の烽火を同志社から全国へ！そして70年安保斗争を国際反戦斗争の一大焦点として斗い抜こう！

〈我々のスローガン〉

- 日米安保協議会粉砕！
- 成田ボーリング実力阻止！
- 王子野戦病院を徹去せよ！
- 7月ASPAC、日米王済合同委員会粉砕！
- 全学連ー反戦への破防法騒乱罪適用粉砕！
- 八月反戦インターを建設しよう！
- 寮斗争を突破口に一切の学園斗争に勝利せよ！

70年安保粉砕！